

あまの川そらなるものとき、しかどわがめのまへのなみだなりけり
 とかきたり、あまになりたるなるべしとみるに目もくれぬ、心きもをまどはしてこのつかひに
 とへば、はや御ぐしおろし給てきか、れば子だちも昨日けふいみじうなきまどひ給ふげす
 の心ちにもいとむねいたくなん、さばかりに侍りし御ぐしをといひてなく、

〔將門記〕嚴父國香之舍宅皆悉殄滅其身死去者迥聆此由心中嗟嘆於財有五主者何憂吟之但哀亡
 父空告泉路之別存母獨傳山野之迷朝居聞之淚以洗面夕臥思之愁以燒智貞盛不任哀慕之至申
 暇於公歸於舊鄉僅著私門求亡父於煙中問遺母於巖隈幸雖預司馬之級還吟別鶴之傳方今以人
 口尋得偕老之友以傳言問取連理之徒

〔源氏物語夕顔〕人々いづこよりおはしますにかなやましげにみえさせ給ふなどいへどみ帳の
 うちにいり給ひてむねをおさへて思ふにいとみじければ、などのりそひてゆかざりつら
 んいきかへりたらんときいかなる心ちせん見すて、いきわかれにけりとつらくや思はん
 心まどひの中にもおぼすに御むねせきあぐる心ちし給ふ御ぐしもいたく身もあつき心ちし
 ていとくるしくまどはれ給へばかきはかなくてわれもいたづらに成ぬるなめりとおぼす
 〔源氏物語角總〕御み、にさしあて、物をおほくきこえ給へばうるさうもはづかしうもおぼ
 えて、かほをふたぎたまへりいとよなよくとあえかにてふし給へるをむなしう見なしてい
 かなるこ、ちせんと胸もひびけておぼゆ

〔源平盛衰記 二十二〕入道申官符事

入道○平盛が私ノ敵ニテモナシ、只君ノ仰ヲ重ズル故ニコソアレト思ヒ存シテ、流罪ニ申宥テ、伊
 豆國へ下シ候ヌ、其年十三ト承キ、カ子付タル小男ノ生ス絹ノ直垂ニ、小袴著テ侍シテ、入道ガ前ニ
 呼居テ、事ノ様ヲ尋問候ヒシカバ、如何アリケンノ事ノ起リシラズト申候キ、ゲニモ幼稚ナレバ、